慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日・タイの「謝罪」の発話行為から見た両国の違い
Sub Title	
Author	ウィッタヤーパンヤーノン, スニサー
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.40 (2004. 12) ,p.31- 43
JaLC DOI	10.14991/002.20041200-0031
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20041200-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日・タイの「謝罪」の発話行為から見た両国の違い

スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン

(1) はじめに

コミュニケーションのやり方の違いが、社会的かつ個人的問題となって顕在化するのは一般的に文化や価値観の異なる人々が出会う場面に多い。今回は、それを「謝罪」という発話行為についての日本語とタイ語の間の差異から考えてみたい。なぜなら、「謝罪」という発話行為において誤解が生じると、それはコミュニケーションの場に非常に大きな影響を与えると考えられるからである。

「謝罪」という発話行為は同じアジア地域の国であることもあって、一見共通のように見えるかもしれないが、その使われ方や意味には違いがある。タイ滞在の日本人駐在員によると、タイ人が失敗をしても、「すみません」と言わない、という。一方、外国人の間では、日本人が自分が悪いと思わなくても「すみません」と言うという話をよく耳にする。

コミュニケーションのやり方が共通していれば、誤解の生じる確率が低いが、相違が大きいとやはり問題の生じる確率があがるのである。こうしたコミュニケーション・ギャップは日本人とタイ人がその一方にとっては外国語、他方にとっては母語でコミュニケーションをしようとするときである。

「謝罪」は他の発話行為と同じく、face の問題と考えることができる。

Brown&Levinson(1987)[1]によると、「face とは誰もが持っている社会的に評価される自分自身の像であり、言語行動においては、その face を脅かす行為がされることがある。人には〈自分の行動を妨げられたくないという欲求（negative face）〉と、〈自分の希望や個性を他人に是認してほしいという欲求（positive face）〉があり、「謝罪」とは、不快な思いをした人間の face を尊重し、維持すると同時に、謝罪する人自身の face を損なうことにもなると述べている。

そこで本稿は日本語とタイ語の「謝罪」という発話行為に焦点を当て、日本人とタイ人が直接的発話行為、つまり意図することと同じようなことを直接言って謝罪を行なうか、それとも、間接的に発話行為、つまり意図することとは違う表現を使用して遂行するか、または、組み合わせて使うか、その言語的、社

会文化的な特徴を探り、また、faceとどのように関係しているのか比較的に検討する。

（2）「謝罪」はどんな発話行為かとこの行為を左右する社会的要因

人は相手に損害を与えたり、不快な思いをさせる場合、その状況を適正なものにしようと「修復行動」（"remedial work"）Goffman(1971)[2]を行う。「謝罪」はその一つである。

「謝罪」の行為において、どのようなストラテジー（言語学的方略）が、どんな頻度で、どのような組み合わせで起きるかは、次の四つの社会的な要因によって左右すると考えられる。このうちの2つの要因は「謝る人」と「謝られる人」の人間関係に関わる。第一は、両者の親疎の関係、つまりよく知っている親しい人か、それとも単なる知人か、または全然知らない疎遠な人なのかというものであり、第二は、社会的地位の関係である。これは「謝る人」が「謝られる人」よりも立場が上か、下か、あるいは同等かによるものである。加えて残る二つの社会的な要因は、謝罪する事柄の内容に関係がある。まず過失の程度がどのくらいか、つまり過失による損失が大きいか小さいかのものである。また、「謝罪」が必要とされる程度、つまり「謝罪」の必要性が高いのか低いのかによる。これらの社会的要因は場面によって、また文化によって異なって認識されており、これによって、使用するストラテジーも異なっていくだろう。本稿では、この四つの社会的な要因が両言語にどのように影響を与えるかも検討する。

（3）謝罪の分析について

「謝罪」の発話行為について、タイ語を中心として、日本語との比較を通して違いを探る。

日本語の「謝罪」の発話行為は、池田（一九九三）[3]に調査したものを一部参考し、タイ語の「謝罪」の発話行為は筆者によるインタビューと筆者がメディア等で使用された表現などから気になって収集したものなどを使用する。

池田（一九九三）は日米の謝罪について調べ、日本人の大学生・大学院生五十人とアメリカ人の留学生二十五を対象に行なった。この調査で取り上げる場面は、状況として

1、「借りていた本を返す約束の日に持ってくるのを忘れた」
2、「約束の時間に三十分遅刻した」
3、「約束の時間に間に合ったが相手が誤解していて三十分遅れたと怒っている」

場合を設定し、各状況の対話者として「指導教授」「親友」を設定した六場面となる。

タイ語の場合、インタビュー対象者はタイ人留学生十人である。インタビュー用に設定した場面は以下の八の場面である。

1、「友人の約束を破った」
2、「試合に負けて親友の期待に応えられなかった」
3、「知らない人にラーメンをこぼした」
4、「自分の失敗が原因で同僚が会議に遅刻した」
5、「自分が会議に遅刻した」
6、「込んでいるバスの中で知らない人の足を無意識に踏ん

でしまった」

7、「同僚の携帯電話を落として故障させた」

8、「両親に失礼な行為をした」

本稿の分析は、インタビューから得られたものと筆者が集めたものを取り上げて、池田（一九九三）に調査したものと比較分析する。

（4）日・タイの謝罪のストラテジー

本稿には日・タイの謝罪のストラテジーを7グループに分類する。グループによって比較分析を行なう。

（4）・1　明確な謝罪の表現

明確な謝罪の表現のグループには、定型表現を用いた直接的な発話行為があげられる。日本語では「すみません」「ごめんなさい」「申し訳ありませんでした」「失礼しました」「悪い」などと、謝罪を表す決まり文句を使用することが普通である。その他の表現としては、「謝ります」「お許しください」がある。

平賀（一九九八）[4]によると「ごめんなさい」は、自分が犯してしまった過失を免じてほしいと相手の許しを乞う表現であり、「すみません」は、自分の非を認めながら、後悔あるいは遺憾の意を表す。「申し訳ない」は、弁明の余地がないと言うことにより相手が正しいということを間接的に認めている表現である。また「悪い」は、自分の非を全面的に認める表現、そして、「失礼しました」は、自分の無礼を詫びている表現ということになる。

しかし、使い分けは上のニュアンスによってだけではなく、使用方法として「謝る人」と「謝られる人」との力関係による使い分けが見られる。目下の人間が目上の人間に謝る場合は、「すみません」「申し訳ありませんでした」の二つをよく使い、一方目上の人が目下の人に謝る場合にはどの表現でも可能になっている。つまり、日本語では、直接的な「謝罪」の発話行為の使い分けが人間関係によってなされているのである。

一方、タイ語では、「thôot」、「khɔ̌ɔ thôot」、「khɔ̌ɔ prathaan thôot」、「khɔ̌ɔ ʾaphai」、「siacai」という「謝罪」を表す直接的発話行為が使われる。

「thôot」、「khɔ̌ɔ thôot」、「khɔ̌ɔ prathaan thôot」は、「罰をください」という意味だが、最初から順番に丁寧さが上がっていく。使い方として、基本的には親しい人には丁寧さの低い表現「thôot」を使い、親しくない人には丁寧さの高い表現「khɔ̌ɔ thôot」、「khɔ̌ɔ prathaan thôot」を使う。しかし、身内、たとえば自分の両親に丁寧さの高い表現を使い、上司であっても仲がいいのであれば、丁寧さの低い表現を使うこともよくある。つまり、タイ語では、「目上」あるいは「目下」で使い分けるというより、親疎関係に応じて使い分けるのである。また、いわゆるウチ・ソトの区別がないということが日本文化の様式と違うであろう。

また、「khɔ̌ɔ ʾaphai」は「許してください」という意味で人間関係の親疎に関係なく、使用され、発話者の態度によって丁寧に聞こえたり、聞こえなかったりする。

「siacai」は「悲しい」という意味で、「謝罪」の対象の事態に

対して自分が悪いと感じる際によく使われる。たとえば、試合に負けて親友の期待に応えられなかった場合に

「raw s̆ĭacai nâ' phw̆an phw̆an pen phrɔ́' raw mâi khɔ̌i fw̆ksɔ̌ɔm」
（ごめんね、私があまり練習しなかったせいだ。）

というように、一生懸命に応援してくれた親友に対して、自分のそのときの感情を伝えることで、「謝罪」行為を遂行する。また、友人が過失を犯したり、失敗したりした際に、自分も「悲しい」（sĭacai）という気持ちを伝えて慰める行為を遂行するケースもある。

（4）・2 責任承認

責任承認のストラテジーには「謝罪」の対象となる内容と事実を述べ、明確に責任を認めることによって、間接的に「謝罪」を遂行するものがある。

「謝罪」の内容を述べることは、「謝罪」の内容を具体的に言うことで言いながら、自分の非を認める姿勢を表わすことである。平賀（一九九六）によると、日本語では、責任の言及は、「謝る人」と「謝られる人」の親疎と相関している。親しい間では責任への言及の頻度が高く、疎遠な間柄の場合にはそれがあまりなされない。その代わりにそれほどひどい過失ではなく、疎遠な人間関係の場合では、「謝罪」の直接的行為に加えて、弁償の提案や相手への気配りが行なわれる。それに対して過失度が重いと判断され、そして、疎遠な人間関係の場合では、責任にはあまり言及せずに、主として「謝罪」の直接的発話行為をして謝る、と述べている。それほどひどい過失ではなく疎遠な人間関係の場合に関しては、タイ語では、「謝罪」の直接的発話行為に加えて、責任を言及し、弁償の提案や相手への気配りも行なわれることが多い。たとえば、知らない人にラーメンをこぼした場合、

「khɔ̌ɔthôot nâ' khá' dichán sûmsâam 'eeŋ thamhâi sŵaphâa khɔ̌ɔŋ khun lɜ́' thɜ́' rɔ́ɔn mâi khá' dichán cà' 'aw pai sák hâi mâi khá'」
（すみません、私が不注意だったからです。暑いでしょうか？私が洗濯しましょうか？）

というように、「khɔ̌ɔthôot nâ' khá'」と言うことで「謝罪」の直接的発話行為を遂行し、「dichán sûmsâam 'eeŋ」と言って、自分の不注意であることを認め、責任を承認し、そして、「rɔ́ɔn mâi khá'」を言って相手への気配りを行い、「dichán cà 'aw pai sák hâi mâi khá'」と言って、弁償の提案を行なう。タイ語では、疎遠な間のほど、長くなる傾向がある。

また、池田（一九九三）は、日本人は相手が目上の場合、誤解であっても、その誤解を解こうとはせずに、そのまま責任を承認し、より明確な「謝罪」をすることによって、人間関係を修復しようとする傾向があると述べている。同じ場合について、タイ人留学生にインタビューをしたところ、殆どは、特に相手

が目上の方に対してならば、タイ人はその誤解をきちんと説明して、理解してもらうことで、信頼関係を修復するだろうと答えた。

タイ語では、発話者が自分の欠点などについて述べ、自分の欠点が原因で、問題が生じたことを伝えて、責任を承認する姿勢を表わして間接的に「謝罪」を遂行することがよく見られる。原因と結果を表わす「tham hâi」という接続詞がよく使われることが特徴である。

たとえば、自分の失敗が原因で同僚が会議に遅刻した場合、

「khɔ̌ thôot khâ, dichán mâi dii ʾ eeŋ tham hâi khun pai prachum mâi than」

(ごめんなさい、私が悪かったです。私のせいであなたが会議に間に合わなくなってしまったんです)

と「謝罪」する。「dichán mâi dii」が、「私が悪い」という意味で、「tham hâi」を接続詞に使うことによって、「原因が私にある」という意味になり、責任を間接的に承認することになる。

タイ語では、明示的に責任を言及して「謝罪」を遂行するよりも、「謝罪」の原因が自分にあること、あるいは、その自分にある原因を明らかにして、それによって失敗してしまったことを伝えて「謝罪」を間接的に遂行することがよく見られる。これは、日本人の感覚では、説明や弁解に聞こえるかもしれないが、自分が原因だということを伝えるのは、責任承認と同様だと考えられる。

(4)・3 説明・弁解

このストラテジーは、自分が悪いと認めた場合であっても自分のfaceを少しでも守るために、自分のせいだけではないこと、また事態がそんなに悪くないことを説明し、「謝罪」する対象の事柄がどのようにして生じてしまったのか、あるいは、ものや相手の非を説明して事態を変えようとするものである。

日本人はこのストラテジーをあまり使わないだろう。とても親しい間同士ならば、使うかもしれないが、それでも弁解に聞こえて、悪い印象を相手に与えたり、この説明の行為によって相手が怒りを感じる可能性が高い。特に目上の相手の場合、たとえ自分が悪くないと思っても、あるいは誤解であっても、事態を説明しないで、それを認めて人間関係を修復すると思われる。

一方、タイ人の場合は、どうだろうか。次のストラテジーをみよう。会議に遅刻した場合、上司に「khɔ̌ thôot khráp rôt man tɨt mâak lɔ̀ai khráp」(すみません、道がとても渋滞していて)と、直接的発話行為をしてから、自分の責任ではなく、道が渋滞していたせいであることを説明して理解してもらう。また、相手に自分が悪くないと思われるように、他人のせいであることを説明することも見られる。たとえば、友人の約束を破った場合、友人に

「thôot jingin khwăw hŭanâa raw maa săŋ ŋaan tɔɔn klâi cà ʾ lâak ŋaan thɛ̌ɛm bɔ̀ɔk hâi sèt phaainai wannán raw kɔ̀ɔ

ləai tɔ̂ŋ yùu tham hâi sèt lá?」

（ごめんごめん、上司が勤務時間が終わる前に仕事を持ってきて、しかも今日中にやりなさいって言われたから、残ってやらなきゃいけなくなったの）

と言うような場合である。つまり、「thôot jiŋjiŋ」という謝罪の直接的発話行為をしてから、「hŭanâa raw maa sâŋ ŋaan tɔ̂ŋ klâi cá? ləək ŋaan thέ̌ɛm bɔ̀ɔk hâi sèt phaainai wannán」と上司に仕事を命令された事態を説明して、自分ではなく、上司のせいだということを理解させて、人間関係を修復し、間接的に謝罪行為を遂行しているのである。

また、事態の理由や原因を言う場合、「phrɔ́?, phrɔ́? wâa, nŵaŋ càak」を、事態の理由や原因を表わす接続詞を使うか、何も使わないことが普通の言い方であるが、インタビューの結果、この場面、「phrɔ́?」、「phrɔ́? wâa」、「nŵaŋ càak」」を使う回答者はいなかった。その代わり、10人中8人が「khŵw」を接続詞として使うことが見られた。「khŵw」は日本語の「です」と同じで動詞の役割をしているものである。ここで元々理由や原因を説明するために使われる「phrɔ́?」、「phrɔ́? wâa」、「nŵaŋ càak」を使わないで、「khŵw」を使うというのは、客観的に理由や原因を説明するのに使われる「phrɔ́?」、「phrɔ́? wâa」、「nŵaŋ càak」に対して、「khŵw」は発話者の「反省」「悪いという気持ち」などという心的な態度を表わすのに使われることだからだと考えられる。

また、具体的な事態や理由を説明しないで、発話に「mii thúrá?」、「mii ŋaan dùan」などという簡単な理由だけ言って、間接的に謝罪の発話行為を遂行することも見られる。「mii thúrá?」は「用事がある」という意味で、「mii ŋaan dùan」は「急な仕事があった」という意味である。たとえば、友人との約束を破った場合、

「khɔ̌ɔthôot ná? mii ŋaan duan jiŋjiŋ」

（ごめんなさい、本当に急な仕事が入って）、

「thôot thii ná? mii thúrá? dùan jiŋjiŋ」

（ごめん、急用ができてしまって）

という発話が見られる。

次に、「弁解に聞こえるかもしれないが、発話者が自分がわざとしたわけではない」という気持ちを伝える。つまり、故意ではなかった旨を陳述して間接的に謝罪の発話行為を遂行するものである。特徴としては、発話に「mâi dâai cèettanaa」、「mâi dâai tâŋcai」、「mâi than rawaŋ」などのような句を使用することである。「mâi dâai cèettanaa」と「mâi dâai tâŋcai」は（わざとするのではない）という意味で、「mâi than rawaŋ」は（不注意だ）という意味である。たとえば、込んでいるバスの中で知らない人の足を無意識に踏んでしまった場合、足が踏まれた人に、

「khɔ̌ɔthôot khráp phŏm mâi than rawaŋ khun luŋ pen arai pai mâak mái khráp」

（すみません、ぼくが不注意だったから。おじさん、大丈夫でしょうか？）

と発話して「謝罪」の発話行為を遂行するものである。この場面に関して、インタビュー対象者の答えはほとんど同じようになっている。つまり、最初に「khɔ̌ɔthôot」という直接的発話行為をして、「phɔ̌m mâi than rawaŋ」のような、〈自分が不注意だったから、自分がわざとではない〉という故意ではなかった旨を陳述し、最後に「pen arai pai mâak mâi」など、相手への配慮を表わす表現を使って、間接的に「謝罪」を遂行するという組み合わせである。

インタビューの最後に日本人に足を踏まれたり、ぶつけられたりしたことがあるかを聞いてみた。全員あったと答えた。その中には、「日本人が謝らない、とても失礼だ、こんなこと信じられない」などという意見もあった。タイ人は特に日本人のこのような態度をどうしても理解できないようだ。日本人はおそらく、こみあっている場所では足をふんだり、ふまれたり、ぶつかったりぶつけられたりすることは仕方のない当然のことと考え、特に「謝罪」もしないし、求めもしないのだろう。

(4)・4 補償の申し出

このストラテジーは自分が起こしたことを補償するために何かをしたいということを伝えて、「謝罪」の発話行為を遂行するものである。日本では「謝罪」をする場合、まず、その意図を最も確実に伝えることができる直接的発話行為を行ない、それに加えて状況に合ったストラテジーを選択して行なうのが一般的だと言われている。なぜなら特に「ソト」集団に対して、故意であることの否定や、事態や原因の説明を強調すると、場合によって「弁解」や「言い訳」だと解釈されてしまう可能性があるからだ。したがって、誤解を招かないように、相手の立場を立てる「補償の申し出」や「相手への配慮」を表わす発話行為を優先するのである。

タイの場合も同じような傾向があると考えられるが、直接的発話行為に加えるストラテジーが日本に比べ多くなっている。タイの「補償の申し出」の場合を見てみよう。「補償の申し出」の内容として一般的な「補償の申し出」と限定的な「補償の申し出」がある。

一般的な「補償の申し出」の場合は、相手が求めるものなら何でも補償することを伝えるため、疑問文を使うことが多い。たとえば、同僚の携帯電話を落として故障させた場合、その同僚に

「khɔ̌ɔthôot cinciŋ nâ? cà? hâi chán chûai tham yaŋŋai dii」
（本当にごめんなさい。私、どうすればいい？）

などと言う。このストラテジーはまず「khɔ̌ɔthôot cinciŋ nâ?」（本当にごめんなさい）という直接的発話行為を行ない、その後に「cà? hâi chán chûai tham yaŋŋai dii」（私がどうすればいい？）と、相手が求めるものなら何でもやるということを伝えるために、形式上疑問文を使用して、「謝罪」の発話行為を遂

行するものである。

これに対して、限定的な「補償の申し出」の場合、ストラテジーが一般的な「補償の申し出」の場合と異なるのは、話し手が補償する内容を自分で決めることである。

たとえば、同じく同僚の携帯電話を落として故障させた場合、その同僚に

「thôot thii ná? mâi dâai táŋcai ləəi, hâi phŏm ʾ aw pai sɔ̌ɔm hâi ná?」

（ごめんなさい、わざとじゃないからね、修理はぼくに持って行かせてください）

などである。このストラテジーはまず「thôot thii ná?」（ごめんなさい）という直接的発話行為を行なってから、「mâi dâai táŋcai ləəi」（わざとじゃないからね）と、故意ではなかった旨を陳述し、さらに、「hâi phŏm ʾ aw pai sɔ̌ɔm hâi ná?」（修理はぼくに持って行かせてください）という、表現上では依頼の表現を使用して「補償の申し出」の発話をすることで「謝罪」の発話行為を遂行するものである。

その他に、全面的に補償する意志を示し、そのためにあえて具体的な補償内容を「謝罪」の時点では限定しないで伝える発話も見られる。自分の失敗が原因で同僚が会議に遅刻した場合、その同僚に

「khɔ̌ɔthôot ná? man pen khwaamphìt khɔ̌ɔŋ chán ʾ eeŋ chán cà? ráppháitchɔ̂ɔp thúk yàaŋ ʾ eeŋ ná? khá mâi tɔ̌ɔŋ pen hùaŋ ná? khá?」

（すみません、私が悪かったです。私はすべて責任をとりますから、心配しないでください）

という状況で考えてみる。このストラテジーはまず「khɔ̌ɔthôot ná?」（すみません）という直接的発話行為を行なってから、「man pen khwaamphìt khɔ̌ɔŋ chán ʾ eeŋ」（私が悪かったです）と、自分を非難して、その後に「chán cà? ráppháitchɔ̂ɔp thúk yàaŋ ʾ eeŋ ná? khá」（私はすべて責任を取ります）という「補償の申し出」を行ない、最後に「mâi tɔ̌ɔŋ pen hùaŋ ná ʾ khá?」（心配しないでください）という相手への配慮を表わす発話をして、「謝罪」の発話行為を遂行するものである。この場合は、発話者が同僚を安心させるために自分がすべて補償することを伝える。そして、その際、具体的な補償の方法を述べない。タイでは、それを具体的に述べないことが全面的な補償の意志を示すことにつながるため、この場合、相手への気配りをしていることだと考えられるのである。

このストラテジーので見たようにタイの場合、直接的発話行為と「補償の申し出」に加えて、故意ではなかった旨を陳述したり、自己を非難して責任を承認し、場合によって相手への配慮を表わす発話も行なうという組み合わせをすることが一般的である。

(4)・5　二度と起きない旨の表明

このストラテジーは、同じ過失を繰り返さないことを約束して、「謝罪」の発話行為を遂行するストラテジーである。このストラテジーに関して、池田（一九九三）の調査では、日本の場合もアメリカの場合も使用頻度が極めて低いとの結果になっている。

タイの場合は、論者の行ったインタビューの結果を見ると、場面によるが、かなり使われることが分かった。タイ語におけるこのストラテジーは、表現上、約束の発話行為の形として、未来形を表わす、「tɔ̀ɔpai」、「wannâa」、「khraawnâa」、「khraawlǎŋ」（これらは全て「今度」、「これから」という意味で用いられる）の言葉の後に、一人称の主語＋動詞という順番で構成されることが特徴的である。よく使用される場面は、両親に失礼な行為をした場面である。たとえば、両親に

「khɔ̌ɔthôot nâ? khráp khun mêɛ tɔ̀ɔpai nûu cà? mâi tham yàaŋníi ʾ iik nǔu sǎicai khâ」
（お母さん、すみません、これからこんなことをもうしないから、悪かったです）、

「khɔ̌ɔthôot nâ? khráp khun mêɛ thíi phǒm ɡùtŋìt kàp khun mêɛ mŵakíi wanlǎŋ phǒm cà? mâi thâm yàaŋníi ʾ iik lέεw」
（お母さん、先お母さんに対していらいらしてしまってごめんね。これからこんなことをもうしないから）

と反省する気持ちを伝えて「謝罪」をしている。

前者のストラテジーにはまず「khɔ̌ɔthôot nâ? khâ? khun mêɛ」と母親に対する直接的発話行為を行なってから、「tɔ̀ɔpai nûu cà? mâi tham yàaŋníi ʾ iik」と約束して、さらに「nǔu sǎicai khâ」と自分の非を認めて、反省の気持ちを表わして「謝罪」の発話行為を遂行した例である。

後者のストラテジーにはまず「khɔ̌ɔthôot nâ? khráp khun mêɛ」と母親に直接的発話行為をしてから、「thíi phǒm ɡùtŋìt kàp khun mêɛ mŵakíi」と自分が母親に「いらいらした」という事態を承認することで、「謝罪」の間接的発話行為を遂行した例である。

ここで示した以外のインタビュー結果の他のほとんどは、約束の発話行為の形として、未来形を表わす、「tɔ̀ɔpai」、「wannâa」、「khraawnâa」、「khraawlǎŋ」の言葉を使い、一人称の主語＋動詞という順番で構成されていた。本稿（3）で示した8以外の場面ではほとんどこの「二度と起きない旨の表明」を使われることのないことも特徴的である。このストラテジーは身内や親しい間柄でしか使わないことだと考えられるからだ。

(4)・6　相手への配慮

このストラテジーは、発話者が被害を受けた相手のことや気持ちを思って、相手の気持ちを理解していることを伝えたり、自分が原因で起きた相手の被害などについて述べることで、相

手を心配する態度や言葉をかけて「謝罪」の発話行為を遂行するものである。

平賀（一九九六）は、日本の場合、ウチとソトの区別、本音と建前の区別という点から解釈すると、責任への言及はウチ集団における本音の詫び行為の色彩が強く、弁償の提案や相手への気配りはソト集団に対しての建前の詫び行為の色彩が強いと述べている。つまり、日本の場合、相手への気配りに関しては、ウチとソトの人間で使い分けているものだと考えられる。

一方、タイの場合であるが、論者のインタビュー調査の結果を見ると、このストラテジーは知らない人間に対しても使用されるが、特に相手が身内や発話者にとって大事な存在の人間であるほど、よく使用されることがわかった。

たとえば、両親に失礼な行為をした場合、

「nǔu khɔ̌ɔthôot khâ nǔu mâi dâai tâŋcai khunmêɛ mâi pen ʾarai chái mái khá?」

（ごめんなさい。そんなことをするつもりがなかった。お母さん、大丈夫？）

と伝えるとき、「nǔu khɔ̌ɔthôot khâ」と直接的発話行為を使って謝ってから、「nùu mâi dâai tâŋcai」と故意ではなかったことを陳述し、「khunmêɛ mâi pen ʾarai chái mái khá?」と聞いて相手の気持ちを心配している態度を見せて「謝罪」の発話行為を遂行する。

また、自分の失敗が原因で同僚が会議に遅刻した場合、その同僚に

「khɔ̌ɔthôot ná? man pen khwaamphìt khɔ̌ɔŋ chăn ʾ eeŋ chán cà? ráppʰitchɔ̂ɔp thúk yàaŋ ʾ eeŋ ná? khá mâi tɔ̀ɔŋ pen hùaŋ ná? khá?」

（すみません、私が悪かったです。私はすべて責任をとりますから、心配しないでください）

と、発話の最後に相手の立場に配慮して心配する必要はないことを伝え、謝罪の発話行為を遂行する。

そして、同僚の携帯電話を落として故障させた場合、同僚に

「chán khɔ̌ɔthôot ciŋciŋ ná? thîi tham thoorasàp mwwthŵw thəə siă thamhâi thəə mâi mii chái chán khɔ̌ɔ kɛ́ɛtua dooi kaan sŵw khrŵaŋ mài hâi ná?」

（あなたの携帯電話を壊してしまって、本当にごめん。わたしのせいで携帯電話を使えなくなってしまった。あなたに新しい携帯電話を買わせてください）

と伝える。ここで「thîi tham thoorasàp mwwthŵw thəə siă thamhâi thəə mâi mii chái」（わたしのせいで携帯電話を使えなくなってしまった）とは、発話者が被害を受けた相手のことを大事に思い、相手の気持ちを理解していることを伝えるために、自分が原因で起きた相手の被害などについて、「謝罪」を行なうものである。

タイの場合、以上の三つの発話を見ると、どれも相手が自分にとって大事な存在であるとき、「相手への配慮」というストラテジーを使っていると言えるだろう。これは日本の場合と異なる特徴の一つである。

(4)・7 相手の攻撃弱化

このストラテジーは話題をそらしたり、明るい局面に言及したり、相手をなだめることによって、「謝罪」や状況を避けようとするものである。池田（一九九三）の調査では、このストラテジーは、「約束の時間に間に合ったが、相手が誤解していて三十分遅れたと怒っている」の場面で70%台で使われる他はあまり使われないとの結果だった。日本人は謝る事柄に対して「約束の時間は3時ではなかったでしょうか」のように言い切らない形を使うことが多いと述べている。

この場面に関して、タイの場合は、相手が親しい間柄でも目上の立場の人でも、疑問点を明確にして自分が遅れていないことを主張し、説明して、信頼関係を取り戻そうとすることが、インタビューの結果から明らかになっている。

また、タイにある日本企業の駐在員の間で、また日・タイ異文化コミュニケーションの研究の中でも、異文化間問題としてよく取り上げられるタイ人の行為の一つに、タイ人がミスをしても、「すみません」と言わないものがある。

たとえば、同僚の携帯電話を落として故障させた場合、自分の失敗が原因で同僚が会議に遅刻した場合、同僚に「mâi pen rai ná, mâi tɔ̂ŋ penhùaŋ diăw phŏm cà? ʾ ăthíbaai hâi hŭanáa faŋ ʾ eeŋ」（大丈夫です。心配しないでください。ぼくは上司に説明しますから）と、「mâi pen rai ná」と言って相手をなだめてから、「mâi tɔ̂ŋ penhùai」と相手の立場を配慮し、最後に「diaw phŏm cà? ʾ athíbaai hâi hŭanáa faŋ ʾ eeŋ」と伝えて、相手との「修復行動」を行なうとの回答が多かった。このように、「khɔ̌ɔthôot」などという直接的発話行為をしないで、相手をなだめてから、事態の責任を持つことを伝えたり、事態の解決案を提案したりして「謝罪」の発話行為を遂行することもよく見られる。

このような行為をどう思うか、インタビューの際に聞いたところ、直接的発話行為をしなくても、その場の事態を解決して態度で示すことで「謝罪」の意味を表わすことができるという。これは、日本人と比べたら、「khɔ̌ɔthôot」をするか、しないかというよりも、相手に対しての態度や責任の取り方やその事態の解決方法の方が重視することだと考えられる。

(5) ストラテジーの数と組み合わせ

池田（一九九三）の調査では、日本人はあるストラテジーを単独で使う場合もあるが、複数のストラテジーが組み合わせて使う場合や、同一のストラテジーを繰り返し使用する場合のほうが多く、また、単独で「謝罪表明」つまり直接発話行為を使うことが多いという。また、相手が教授など目上の人間ほど単

独使用する頻度は高く、そして、ストラテジーを二つ使うだけで終わる場合も非常に多いと指摘する。

一方、タイ人は、あるストラテジーを単独で使うことがほとんどない。複数のストラテジーを組み合わせて使う場合のほうが圧倒的に多い。事態の過失の程度や相手と関係なく、用いられるストラテジーの数が一つの場合と二つの場合の使用頻度が日本の場合と違って、タイでは、「謝罪表明」だけを使うことが少なく、場面に応じて「説明・弁解」や「補償の申し出」、「相手への配慮」と組み合わせて使用するストラテジーの数を増やしている。しかし、特徴的なのは、事態の過失の程度の大小と用いられるストラテジーの数には関係がないということである。つまり、過失の程度が小さい場合も、ストラテジーが単独で使われることはなく、複数用いられるのである。

(6) face という視点からみた謝罪の発話行為

冒頭に述べたように、Brown & Levinson(1987)は、人間には「自分の行動を妨げられたくないという欲求」(negative face)と、「自分の希望や個性を他人に是認してほしいという欲求」(positive face)がある上で、「謝罪」とは、不快な思いをした人の face を尊重し、維持すると同時に、謝罪する人自身の face を損なうことにもなると述べている。

日本人の「謝罪」は、多くのストラテジーを使うのではなく、低姿勢でひたすら謝る形をとり、説明・弁明はストラテジーとして好まれず、特に目上の相手に対しては使われない。

また、自分が悪いと思ってなくとも「謝罪表明」のストラテジーを使うという日本人の行為について、異文化コミュニケーションの場でよく話題に取り上げられるが、これはタイ人を含めて外国人には不誠実な「謝罪」のように思えるだろう。これについては、池田(一九九三)は、日本人にとっては、タテ構造の日本の文化社会において、相手との関係や役割を認識することが重要であり、日本人の face は、相手に認められ受け入れられることと深く関係しており、そのため、日本人は、特に相手が目上の場合には、説明・弁明をあまり使わないで責任承認を明確な「謝罪表明」と併用するなどして、相手の face を尊重することを重視し、謝罪の表明を効果的に行うこと自体に重点をおくのだと述べている。

タイは個人個人を重んじる社会だと言える。このような社会においては、相手と自分のそれぞれの face を尊重し、維持することが必要となる。「謝罪」の場合は、不快な思いをした人の face を尊重する一方で、「謝罪」する人自身の face を損なうような行為ともなってしまう。そのため、タイ人は、「直接的発話行為」に「説明・弁明」を加えたりして、自分の face を損なうのを最小限にとどめようとし、また、相手の face を尊重するために、いくつかのストラテジーを併用し、「説明」や「補償の申し出」を使うなどして、修復のための交渉を行う。「直接発話行為」をした後に、「説明」や「補償の申し出」を使い、時に、「直接的発話行為」を使わずに、「相手の攻撃弱化」を行う、というのは、日本人から見ると、弁解や言い訳に見えるかもしれないが、これは問題となっている事態や状況を解決していこうという行動なのである。

また、タイ人は日本人と比べると、特に「相手への配慮」のストラテジーをよく使用して、相手との関係を修復しようとする。これは、自分の希望や個性を他人に是認してほしいという欲求がある上で「相手への配慮」の行為を行なうと考えていいだろう。

（7）おわりに

本稿では、タイ・日の「謝罪」の発話行為を、ストラテジーの言語的、社会文化的な特徴、使用頻度、使用ストラテジーの数・組み合わせについて分析し、タイ・日それぞれの文化社会における face という視点から考察した。

日本人は相手が目上の場合、誤解であっても、その誤解を解こうとはせずに、そのまま責任を承認し、より明確な「謝罪」をすることによって、人間関係を修復しようとする傾向がある。このような行動を、タイ人を含めて外国人からみると理解できなくなってしまう。

逆に、問題を起こしたり、誤ったりした際、「直接的発話行為」をした後に、一生懸命事態や理由の説明して、補償の申し出を行い、ときには「直接的発話行為」も言わないで、相手をなだめてから、事態の責任を持つことを伝えたり、事態の解決案を提案したりして謝罪の発話行為を遂行するタイ人を見ると、日本人が「謝らない」「いいかげん」「弁解」「言い訳」というように見えてしまう。

このようなコミュニケーションのすれ違いは、日本人とタイ人がその一方にとっては外国語、他方にとっては母語でコミュニケーションをしようとするときに生じる。このことは母語と外国語の間でやりとりをする際には、単なる語彙、文法の理解だけではなく、相手の母語、社会のもつ文化、歴史的背景を考慮しなければ、相手の意図を正確に把握できないことの証明もなるだろう。故に、このような異文化ディスコミュニケーション状況を明らかにすることによって、異文化コミュニケーションの場面で生じ得る誤解を回避、解消することに繋がるだろう。

参考・引用文献

（1）Brown, P.and S.Levinson. 1987. Politeness:Some Universals in Language Usage. Cambridge: Cambridge University Press.

（2）Goffman, E.1971. Relations in Public: Microstudies of the Public Order. New York: Halt, Rinehart and Winson.

（3）池田理恵子（一九九三）「謝罪の対照研究－日米対照研究－」『日本語学』Vol.12

（4）平賀正子（一九九八）「日本人のコミュニケーション行動と英語教育－比較文化語用論からの展望－」『日本語学』9月

（5）Thasanee Mekthaworniwatana (1999). "The Speech Act of Apologizing in Thai" Songklanakarin Journal of Social Sciences and Humanities 5 (3) Sep.Dec.1999.

（6）Room Jiranukrom (1995), "Phasasaat Neewoatibatniyom" Chiangmai University